

家族の危機はどう克服されるか

—— Günter Grass: Im Krebsgang における家族の物語と「ドイツ」——

杵 渕 博 樹

1.

ギュンター・グラス (1927-) は 1999 年にノーベル文学賞を受賞し、同年、20 世紀の総括とも呼ぶべき趣を持った『私の一世紀』Mein Jahrhundert を発表している。2002 年 2 月に発表された『蟹の横這いで』Im Krebsgang は、彼がノーベル賞受賞者としての権威を身に帯びて世に問う 21 世紀最初の作品だが、圧倒的多数の批評家から絶賛され、発表初日に 5 万部の初版を売りきり、二週間で 25 万部を超えたと言う。¹⁾

本論では、まず作品を構成する主要事件群の相互関係を明らかにし、それらの事件群と語り手との関係を手掛かりに、物語構造の特徴を整理する。さらに、それを踏まえて、この物語構造およびそれに規定された語られ方のもとで浮かび上がる、この作品の思想的・政治的位置価値を分析する。²⁾

2.

この作品は、三つの主要事件に関する報告よりなる。

ひとつは、1936 年 2 月 4 日スイス、ダヴォス Davos で起こったヴィルヘルム・グストロフ暗殺事件である (24-25)。シュヴェーリン Schwerin 出身のこの男は、ナチスの組織指導者としてスイスで活動していた。暗殺者はユダヤ人医学生ダーヴィト・フランクフルターであった。

二つめは、このナチ党员グストロフにちなんで名づけられた、汽船グストロフ号の沈没事件である (130-140)。1945 年 1 月 30 日、この船は旧ダンツィヒ、現グダニスク沖でソ連の潜水艦に撃沈され、軍人軍属のほか、多くの旧ドイツ東部地域からの避難民を含む約 9000 名の犠牲者を出したとされる。

1) Vgl. Vormweg, Heinrich: Günter Grass, RORORO Monographie, Überarbeitete und erweiterte Neuausgabe, Reinbek bei Hamburg 2002, S.160-161. グラス作品をときに酷評することで知られ、『果てしなき荒野』Ein weites Feld (1995) などは引き裂いて見せた Marcel Reich-Ranicki も、今度ばかりは感動の余り泣いたと言う。Vgl. Theurich, Werner: Reich-Ranickis Solo, Feuerwerk mit feuchter Wunderkerze, „SPIEGEL ONLINE“ vom 6.2.2002

2) 使用テキストは、Grass, Günter: Im Krebsgang, 3. Aufgabe, Göttingen Februar 2002. 以下、本文中及び脚注における丸カッコ内の数字は、このテキストの参照ページを示す。

三つめは、1997年4月20日、ユダヤ人差別を背景にしたシュヴェリーン在住の少年による殺人事件である(172-175)。この少年コンラートの祖母トゥラ・ポクリーフケはグストロフ号乗船者の生き残りで、救出された直後、その沈没の瞬間に、息子パウル(すなわちコンラートの父)を出産したことになる(138-139)。コンラートは、ナチ黨員グストロフ、およびグストロフ号に関するウェブサイトインターネット上に公開しており、チャットルームで知り合った、ユダヤ人「ダーヴィト」を名乗る少年を、地元シュヴェリーンに呼び出して、上述のグストロフの記念碑跡で射殺する。

これらの事件について報告するのは、上述のパウルである。彼は、グストロフ暗殺事件の当事者二人と、グストロフ号を撃沈した潜水艦艦長マリネスコを、このふたつの事件に係わる主要人物として扱い(9, 13, 14)、三人の足取りを交互に追っていく。暗殺事件およびマリネスコについては、文献資料からの再構成を思わせる簡潔な報告がなされるが、グストロフ号の進水から沈没にいたる経緯については、トゥラの証言が頻繁に引用され、その都度、息子としての語り手の親子関係を背景にしたコメントが付される。

コンラートの殺人事件については、語り手は、のちに事件当事者となるふたりの少年のチャットルームでの対話を追ひ、引用とコメントを重ねていくが、これらの内容は、前述のふたつの主要事件に係わるものがほとんどなので、同時にそれらに関する報告ともなっている。グストロフ暗殺事件とグストロフ号沈没事件が、語り手が時代を共有していない「過去」に属する出来事であるのに対して、コンラートの殺人事件は、その伏線段階であるネット上の対話の報告をも含めて、語り手の生きる「現在」に属している。この時間的關係を反映して、「過去」のふたつの事件は、「現在」の事件の歴史的背景として機能していると言える。³⁾

また、グストロフ暗殺とグストロフ号沈没については、その事件の概要があらかじめ示されている(11, 14, 28)のに対し、チャットルームのふたりが初めて直接対面するときには何が起るかは、ほかの二つの事件についての詳細な報告がほぼ終了したのちに初めて明らかにされる(174)。作品を構成する全九章中、第七章までは、三つのエピソードが同時進行的に語られてゆくのにに対し、第八章は主にコンラートの裁判の過程を、第九章はその後服役中の彼と語り手との交渉を中心に描いている。つまり、作品全体を通して語られているのは、コンラートの殺人事件だけである。

以上見てきたように、この作品の内容的・構造的中心に位置するのは、コンラートによる殺人事件である。「過去」に属する残り二つの事件の経緯は、これらの事件に関する彼の知識の「現在」における増大に対応しながら、彼の言動を追う記述と同時進行的に語られてゆく。この物語展開の形式は、彼の内部で進行する、殺人というクライマックスへの

3) これらの事件に関する報告の合間には、グストロフ号生存者集会など、語り手の現在に比較的近い、彼自身が居合わせた現場についての記述も行われるが、これらは主に語り手の、母、妻、息子ら家族との交渉に係わるものなので、コンラートの事件に連なるエピソードであると言える。

接近の過程における「過去」と「現在」の響き合いを体現している。⁴⁾

3.

語り手の母トゥラは、グストロフ号沈没の悲劇を広く世間に知らしめねばならないと考えており (19, 116)、当初その役割を期待されていたのは息子パウル (語り手) であったが、当人はこの惨劇の最中での自分の誕生を呪われたものと考え (70, 144, 151)⁵⁾、その使命をこれまで実行しようとしてこなかった。今や、トゥラの期待を担っているのは、語り手の息子コンラートである (94-96, 100)。

このように、この作品で語られる内容は、語り手にとって、まさに自分自身の出自に係わる問題であり、そしてそれは同時に自分の家族を巡る物語、特に息子の物語である。

ただし、ここでは、自分の半生や肉親に係わる物語が当然要求するであろう感情的ニュアンスは、語り手の職業がジャーナリストであるという設定によって最低限に抑えられる。この「報告」が、「ジャーナリストとして」の自覚のもとに語られているということは、再三強調されている (39, 75, 93, 137, 197)。⁶⁾

さらに、この「ジャーナリスト」の物語作業は、この作品自体が雇用者からの依頼のもとで語られているという枠組みによっても規定されている。彼の「報告」作業は、依頼主による介入を前提にしているのである。ここで、語り手が雇用者 Arbeitgeber と呼ぶ男は、作者ギュンター・グラスその人である (7, 54)。グラスは、語り手の母トゥラと同じ世代に属し、「ほんとうは自分の世代こそがこれを語るべきだった」と考えている (77, 99)。彼らはともに、グストロフ号沈没事件の地元であり、この事件に象徴される旧ドイツ東部地域難民の悲劇の舞台のひとつであるダンツィヒの出身である。語り手の背後に控える雇用者グラスは、「ジャーナリスト」としての仕事ぶり、すなわち報告対象との一定の距離の保持を要求するのみならず、並行して物語られる各エピソードの展開の仕方、順序などについても注文をつけている (55, 78, 139, 199)。

語り手が依頼されて報告を行うという設定は、1992年のグラス作品『鈴蛙の鳴き声』Unkenrufe にも見られる。ただし、両者を比較すると、『鈴蛙の鳴き声』では、依頼者と語り手との間にさまざまなレベルでの葛藤があったのに対し、『蟹の横這いで』における依頼者グラスと語り手との間には、特に作業方針に関する対立が存在しない。ここでグラスが要求するジャーナリスト的な「中立性」については、語り手自身にも異論はないので

4) グラスは、「現実」を過去・現在・未来という時間秩序としばしば矛盾するものと捉え、三つの時制が混在するようなモデル Vergegenkunft を提唱している。Vgl. Günter Grass, Harro Zimmermann: Vom Abenteuer der Aufklärung, Werkstattgespräch, Göttingen 1999, S.167

5) この日付は、1933年のナチス政権誕生の日であり、グストロフの誕生日でもある (11, 116)。

6) 語り手は、大学の作家コースで学んだこともあるが、創作の才能は認められなかったと言う。(30)

ある。

グストロフ暗殺、グストロフ号沈没とその周辺の出来事について言えば、その同時代人グラス自身、あるいは彼の同世代が語った場合に比べて、その次の世代に属する語り手パウルが語る場合のほうが、仮に職業ジャーナリストならずとも、語られる対象との距離を取ることが容易なのは確かだろう。グラスは、より自然な仕方でも客観的記述の体裁を実現し、この作品のテーマ選択が作者自身の意思を反映したものであることをあえて作品内部で強調するために、彼自身の意図をある程度忠実に反映する義務を負わされたこの語り手パウルを、「自分の代弁者」*seine verstellte Stimme*⁷⁾として利用しているのである。

全編を通して盛んに直接引用されるトゥラの言葉は、語り手のなかで生々しい存在感を持ち、あたかも体験したことであるかのように、彼の報告に感覚的・主観的ニュアンスをもたらしている。幼少時から繰り返し母親に語り聞かされることで、語り手はその追体験を強いられてきたからだ。しかし、このような場合にも、それが他人の証言の引用であることは、形式(引用符付きの直接引用)からして明らかなので、語り手の感情の動揺は間接的に暗示されるにとどまり、語られる対象との距離は確保されていると言える。

また、コンラートの事件に関する報告においても、基盤となる情報の自由な確保と、語られる対象との距離の保持との双方を実現するための仕掛けがある。すなわち、発信されたメッセージだけを通じて、第三者の介入なしに、誰もが即座に公的存在になるという、サイバースペース特有の公共性の利用である。

語り手は、グストロフに倣って「ヴィルヘルム」を名乗るコンラートと、フランクフルターに倣って「ゲーヴィット」を名乗る人物との間で交わされるインターネット上の対話の引用を中心にして、事件にいたる過程を報告してゆく。ここでは、リアルタイムで進行する会話を、会話には参加していない第三者が自由に覗き見できる。つまり、対話の当事者たちがその瞬間を経験するのと同時に、報告者は、文字情報のかたちで提供される一次資料に目を通して見る。この資料は、対話当事者が実際に経験している「現実」そのものである。このことは、「現在」の出来事を、あたかも資料に基づいて再構成された「過去」の出来事のような距離感で、なおかつ、「現場」に居合わせた者ならではの「臨場感」を持って報告することを可能にしている。

しかも、語り手は当初、このウェブサイトの管理者、すなわち、チャットルームにヴィルヘルムとして登場する人物が自分の息子であることに気づかない。したがって、少なくともこのヴィルヘルムの正体に気づく場面までは、チャットルームの様子を報告する語り手は、身内の問題について語らねばならない、というジャーナリストとして困難な条件から解放されていると言える。⁸⁾

もちろん、殺人事件の場面以降は、語り手はまさにみずからの「現在」を語らざるをえ

7) Vgl. Raddatz, Fritz J.: Im Krebsgang, Gespräch zwischen Fritz J. Raddatz und Maike Alboth. In: Günter Grass, Unerbittliche Freunde. Ein Kritiker. Ein Autor, Zürich, Hamburg 2002, S.125

8) この設定には、インターネットにおける一般利用者同士の匿名性の高さが反映されている。

なくなり、「ジャーナリストとしての報告」への自己規制をめぐる葛藤が生じるが、いずれにせよ、報告内容から距離を取ろうとする語り手の禁欲的姿勢は最後まで貫かれる。

語り手パウルの「語る行為」における、このような「ジャーナリスト的」、「中立的」、傍観者的特質は、物語内容への直接の政治的価値判断を回避するものである。また、報告者に過ぎない彼には、報告内容となる事件の展開を左右することはできない。このことによって、語り手は、物語行為における創作者としての政治的責任を免れる。こうして、もっぱら、物語内容の選択と、それぞれの報告に割り当てられる記述の比重のみが、作品内容全体の政治的位置価値を暗示するものとなる。

また、語り手の報告内容に対する政治的価値判断の一般的抑制は、彼の（息子として、父親としての）家族関係内部に限定された位置価値を、消去法的な仕方では強調していると言える。すなわち、きわめて公共性の高い歴史的題材の報告者としての彼は、その報告を受ける社会との間に、重大な政治的責任を伴う特殊な関係を結ぶことになるが、ジャーナリスト的「中立」指向が繰り返し言明されることで、その関係における彼の傾向性は目立たなくなり、相対的に、家族関係における彼の個性が際立たせられる。この作品における彼の具体的な行動は、すべて家族の問題に係わるものであり、ほかの人物との直接的交渉の大部分は、家族の成員との間で行われるものだ。そこでは、彼自身によるその描写の仕方に係わらず、語り手自身の行動そのものが彼の感情や価値判断を反映している。そのため、そこから読み取れる、家族関係における彼の価値判断の特徴は、政治的禁欲のもとにおかれた記述の総体が示す価値判断の特徴以上に、語り手パウルという人物の傾向、すなわちこの作品の物語テキスト全体の帯びる政治的傾向の特定の際には、決定的なものとなる。⁹⁾

4.

以上論じてきたように、この作品の全体は資料と証言に基づく報告としての枠組みを持っているが、そのなかでも、語り手の母、トゥラ・ポクリーフケの証言の重要性は突出している。

彼女は、小説家グラスの出世作『ブリキの太鼓』Die Blechtrommel (1959) とともにいわゆるダンツィヒ三部作を構成する『猫と鼠』Katz und Maus (1961) と『犬の年』Hundejahre (1963) の主要登場人物である。このことだけでも、それが念頭にある読者からすれば、彼女にはあらかじめ特権がそなわっていると言える。語り手パウルのこの作品におけ

9) Harald Jähner は、パウルのほかに、グラス、トゥラ、コンラートを加えて、この作品には三世代からなる四人の語り手がいるとしている。同一の歴史的事件に対して、異なる見解を示す声がほぼ対等の関係で並存していること、そのことによって、多面的、立体的な物語記述が実現していることは確かであるが、本論では、物語構造を問う文脈を優先し、形式的には唯一の語り手であるパウルに第一の焦点を当てる。Vgl. Jähner, Harald: Tulla, unerlöst und heimatvertrieben, „Berliner Zeitung“ vom 5.2.2002

る役割自体、トゥラの息子という設定によって成立している。彼女がグストロフ号の生き残りであるからこそ、パウルはこの物語を語らねばならないのである。

彼女の言葉の引用頻度の高さは顕著であり、語る様子の記述の詳しさも目立つ。また、常に方言で語られているため、テキストのほかの部分との差別化の程度も高く、印象的である。しかも、彼女は、殺人事件を起こしたコンラートの共犯者に近い存在なのだ。

孫コンラートにグストロフ号沈没の話を書かせたのは彼女である。結果的に事件の遠因となるコンピュータを買い与えたのも (67-68)、凶器として使われたピストルを購入したのも彼女である (198)。そして、コンラートは、ダーヴィト・フランクフルターによるグストロフ暗殺事件を、丁度裏返した仕方で行行におよぶ。すなわち、「ドイツ人」(＝ナチス) による「ユダヤ人」(＝反ナチス) の殺害であるが、彼はピストルの発砲回数まで同一としている (28, 175)。この「復讐」としての殺人にいたる論理もまた、トゥラの抱いていた、グストロフ暗殺事件とグストロフ号沈没事件とを重ね合わせるイメージそのものであった。

つまり、彼女はこの作品で扱われる主要な二つの事件の体験者であり、残るひとつであるグストロフ暗殺事件を、同時代人としてそれらに結びつけ、「現在」によみがえらせる人物なのである。

この彼女の物語上の個性の中核をなすのは、その生き残り能力である。グストロフ号の沈没の際、結果的に救助された者の多くは成人男性であった (137, 152)。そのなかで、妊婦という不利な条件を抱えながら彼女は奇蹟的に生き残り、無事、出産した。その後の難民としての避難行も困難なものだったが、やはり生き延び、旧 DDR 時代には職人、親方として成功し、DDR 崩壊後も、うまく時流を読んで成功している (89-90)。彼女は沈没したグストロフ号の代わりにナチ幹部ヴィルヘルム・グストロフの記念碑跡に花を手向け (40, 91)、DDR 時代には SED 党员として出世しながら息子を西へ送り出し、ドイツ再統一後もスターリン主義者を自認しつつ (169-170)、最近ではカトリックに帰依して、祭壇をレーニン、スターリンの肖像と同居させている (212)。

彼女は、その存在自体が、矛盾に満ちた歴史に対する皮肉であり、一貫性をもった政治的立場なる概念そのものに対するアンチ・テーゼである。彼女は、それぞれの時代に権力を握っている者を、その欺瞞的正体を暴露したうえで信奉し、その信奉対象への執着自体は時代の変化にもかかわらず捨てようとしない。そもそも、醜悪な側面をも承知の上での不条理な信奉であるから、特定の権威が崩壊しても、彼女には価値基準を巡る混乱は生じない。彼女の政治的生き残り能力は、体制の変化に左右されないのである。

彼女の特権的存在感の要因はほかにもある。この作品においてもっとも身体的個性を強調されて描かれているのが彼女であるという点である。彼女は子供のように小柄でやせている (164, 198)。乳房も小さいとされ、母乳も出なかった (155, 165)。女性としての身体的典型性は見られない。しかし、彼女には男性をひきつける能力があり、性的パートナーにはこと欠かなかったという (55-57)。彼女の髪は、グストロフ号沈没時、死んでゆく大勢の人間たちの悲鳴を聞いて以来、ショックで真っ白になったままだ (55, 94, 140)。

トゥラについてのこのような描写は、髪型や眼鏡について同じ表現が繰り返されるか、おおまかな体型や背丈に言及されるだけのほかの人物の場合とは明らかに異なる。

また、これらの身体的特徴は、どれも彼女の生き残りのエピソードに係わっていると言える。母乳が出なかったという条件は、彼女が、難民としての困難な状況にも係わらず、生まれたばかりの息子に乳を与えてくれる女性をいつも誰かしら見つけ出したというエピソードの前提となっているし、男性をひきつける一方で、特定の男性との関係に縛られることがなかった点は、職業上での自立した成功のリアリティを裏付けるものと解釈できる。

身体レベルでの生き残り闘争を経験し、それに勝ち残り続けてきたことによって、彼女の身体的存在感は、ほかの登場人物をはるかにしのぐ。目前に迫る死を免れ、しかもそのような状況下で別の命をも産み落とした「体験」は、彼女に作品の主要エピソードを支える存在としての特権をもたらす要因となっている。報告者としてのパウルも、主にネット上の発言を通して描かれるコンラートも、その肉体をそなえた個性としての存在感では、トゥラには遠くおよばない。

語り手パウルは、「政治的に間違っただけは報道しない」という消極的ポリシーに従いつつ、時代の流れに身を任せてニュースを追ってきたという(210)。その意味では、彼もまた戦後ドイツを、彼なりのやり方で生き抜いてきたことが強調されていると言える。しかし、ひとり立ちしてからの彼は、身体的生き残りが問題になるような危機にさらされたわけではない。また、彼は、「ジャーナリストとして」、物語における自分の個人的存在感を意識的に抑えようとしている。そもそも、まず第一に記事として存在しようとし、その記事の背後に身を隠すという意味での一般的ジャーナリスト性は、職業人としての語り手を、身体的存在としてよりも、むしろ言葉の存在として印象づける傾向がある。しかも彼は、自分が現場に居合わせなかった「過去」を、一種のヴァーチャルリアリティ的な仕方でも再現している。彼は、当時の記者のひとりになってグストロフ号に乗り込み、なかを歩き回りながら様子を報告するのである(58-60)。このような時空を超えた視点の自在さは、それが資料に基づいた想像による再構成であるとの本人の保留付きであったとしても、語り手の作品中の「現実」における身体性を相対化していると言える。

また、「ヴィルヘルム」としてのコンラートと、のちに彼が殺害することになる「ダーヴィット」としてのヴォルフガングに関する描写のほとんどは、チャットルーム内の発言の引用によるものだ。彼らの存在のリアリティにおいて、個性を伴う身体性の占める割合は少ないのである。

このように、トゥラの身体性は顕著であり、彼女に特権的存在感を与えている。そして、その身体は、生き残ることそのものを象徴していると言える。彼女は多様な政治的ポテンシャルを孕んだ歴史的イベントと、その身体において関係を結んできた。その実績と、それを体験として語り続けることとによって、彼女は「現在」を生きる歴史的問題性を体現する「過去」そのものとなる。彼女はパウルの単なる母ではなく、コンラートの単なる祖母ではない。彼女の饒舌な証言と特殊な肉体の存在感によって、彼らは、「現実」にはありえないはずの仕方でも、ある特定の輪郭とニュアンスを具えた「過去」を「体験」させられて

しまう。この「過去」はトゥラの体験に基づいているという意味で歴史的「事実」であるが、この「事実」は、「トゥラ」というひとつのフィルターを通して形成された「神話」でもある。彼女はひとつの家族の枠を越えた神話的存在として、物語世界の「現実」の中核を担っているのだ。だとすれば、パウルが「魔女」として母トゥラを怖れ(193)、結局彼女のもたらす禍に抵抗することができないのも、彼女の存在と言葉に、コンラートを殺人に導くほどの、世代を越えた説得力があったのも当然のことである。

このことは、作品内の「現在」における事件の本質的責任が、彼女にのみ集中することをも意味する。語り手は自らの呪われた出自に繰り返し言及し(70, 144)、息子の事件に関する責任をもっぱら母トゥラに帰そうとする(68, 193)。しかし、パウルには自明のものである彼女の魔力に、裁判に係わる専門家たち、すなわち、裁判官、弁護士、精神科医たちはまったく気づかない。つまり、物語展開のダイナミズムのレベルでは、このトゥラこそが「現在」の時点におけるすべて出来事の起点となっているにも係わらず、パウルと彼の妻ガビ、そしてトゥラ本人以外の人物にはそれがわからないという設定になっているのである。ここでは彼女はすでに神話化された存在であり、一般の人間の次元で政治的あるいは道義的責任を問えるような対象ではない。つまり、コンラートの殺人事件は、語り手にとっては、家族の「歴史」の次元で理解されるべき出来事であるが、物語展開のダイナミズム、すなわち物語的真実においては神話的悲劇なのであり、その「真実」を認識できない、この神話的家族の外部のひとびとにとっては、責任関係も因果関係もけっして解明することのできない出来事なのである。宿命論的嘆きのもとで語られる神話的悲劇としての殺人は、そもそも加害者の個人的責任を追求できるような性質のものではない。

もちろん、この物語展開からは、物語全体に対するトゥラの神話的影響力、語り手における宿命論的ニュアンスの一方で、「過去」の放置・隠蔽・黙殺をこそ諸悪の根源とする価値判断も読み取ることができる。報告依頼者グラスも、語り手パウルも、みずからの怠慢によって、このような「過去」の不当な扱いに加担してきたとの自覚があり、今、遅まきながらその「過去」を語ることで責任を果たそうとしている。この文脈では、殺人事件の遠因はこの「過去」への欺瞞的対処であり、道義的責任はそのような欺瞞を担ってきた大人たちにあるのであって、コンラートもまた「歴史」の犠牲者に過ぎないということになる。やはり、彼の個人的罪は本質的には問われえないのである。

このように、この事件が神話的悲劇であるにせよ、「過去」の隠蔽に起因する歴史的必然であるにせよ、殺人事件の思想的背景を強調する語り手の姿勢にも係わらず、彼が提示するこの事件に関する情報の総体は、この事件をナチズム、あるいは差別的民族主義一般との関係において追求する方向よりは、むしろ、トゥラを中心とした、特殊な背景を伴う家族内部で展開する「神話」において理解しようとする方向を示している。語り手自身が家族の一員として「神話」に巻き込まれている以上、冷静なジャーナリストのアプローチにも限界があるのだ。このことは、グラスがパウルに自分の代弁者としての役割を与えていること、懐かしい作中人物であるトゥラに特別な思い入れを持つであろうことを考えれば、作者である彼自身が、この作品で描かれる出来事を「家族」の問題としての特別な近

さで捉えていることを示していると言えるだろう。

5.

グストロフ号沈没は、語り手パウル誕生の物語であった。そしてそのパウルの息子コンラートは、祖母の影響のもとで、個人的テロルに走る。そのコンラートが手本としたのは、暗殺されたヴィルヘルム・グストロフであった (195)。

コンラートが生まれたとき、パウルはまだ駆け出しのジャーナリストだった。彼は教師を目指す妻ガビの学業再開にともなって子育てを押しつけられることを嫌うが、やがて彼女のほうが息子を連れて西ベルリンを去り、幼年時代を過ごしたメルン Mölln に移る (42-43)。以来、パウルは息子に会うことも少なくなっているが、たまたま注目していたネオナチのウェブサイトの内容を追ううち、このページを開設しているのは自分の息子なのではないかと疑い始め、母や元妻にあわてて連絡を取る (76)。一方、右翼に目覚めた息子に対して、自身は左翼良識派であるガビはなんらの有効な手立てもなく、最終的には姑トゥラのところへ厄介払いしてしまう (117)。

したがって、このトゥラこそが、事件当時のコンラートの唯一の家族であり、もっともリアルな親族である。その祖母にとって、グストロフ号は、衝撃的な体験をした現場でもあるが、戦局が悪化するまでは楽しい思い出の場でもあり (29, 32-33)、ナチ時代の肯定的側面を象徴するものであった。ナチの大衆娯楽政策組織のひとつ KdF の所有していたグストロフ号は、見かけ上階級差別のない船旅を低料金で党員に提供していた (38-40, 50)。それはトゥラにとって、そしてその影響を受けたコンラートにとって、社会主義的理想の実現のモデルとなっている (29, 88-89)。また、彼女は船名の由来となった男に対して、船自体に対するのと同様の愛着を持っている。彼女がシュヴェリーンに居を定めたのは、そこが彼の故郷だったからである (157)。

このような人間グストロフと客船グストロフ号との重ね合わせのもとで、記号「グストロフ」は、象徴的「男」となるが、このなじみの「男」に、トゥラは相当な好感を持っている。彼女が出産したのはグストロフ号沈没の瞬間だとされるが、だとすれば、「彼」は、彼女の奇跡的生存と出産とに立ち合ったとも言える。赤ん坊は「グストロフ号の子供」„Kind der Gustloff“ (93) なのである。さらに、産み落とされたパウルの現実の父親は不明である (151)。しかも、グストロフ号沈没の日付 1 月 30 日、すなわちコンラートの実の父パウルの誕生日は、グストロフの誕生日でもある。このような、あまりにもお誂えむきの設定によって、この「グストロフ」をトゥラの象徴的な夫とし、パウルの父、コンラートの祖父とする構図が可能となる。

しかし、ナチズムに対する否定的評価を当然と考える語り手パウルにとって、歴史上の人物グストロフはなによりもまずナチの活動家であり、その名を取った船上での自分の誕生は、その日付からして「呪われた」ともと認識されている (151)。つまり、彼は「父」の等価物としての記号「グストロフ」を嫌悪している。

他方、コンラートは不在の父パウルの場所に「祖父」グストロフを迎えた。この「祖父」は、ナチ幹部であると同時に、戦争「被害者」としてのドイツ大衆の象徴（＝客船グストロフ号）でもある。この父親の代わりとなった「祖父」は、当然ながら現実には存在しない。しかし、この不在には明快な理由がある。グストロフはユダヤ人に暗殺され、グストロフ号はロシア人に撃沈されているのだ。

この擬似家族において、コンラートは拡大された「血縁」関係によって戦争「被害者」としてのドイツ大衆（＝グストロフ号沈没犠牲者）と結びつき、祖母を通して、すなわち現実の血縁という根拠に保証されながら、難民体験を共有する。その結果、コンラートは、もはや「現在」を生きる自由な個人ではなくなり、生き残った者たちが呼び覚ます死者たちの無念を晴らすために、「過去」を代表する者としてふるまわざるを得なくなる。それは逃れられない血縁関係の強制である。彼を見捨てなかった唯一の肉親トゥラの期待に、彼は応えないわけにはいかないのだ。こうして、トゥラによって保存された「過去」は、この「血縁」関係の膨張が要求する「民族」幻想を通じて、「現在」にその対応物を出現させる。

6.

この作品の設定では、少年射殺事件におけるコンピュータとインターネットの役割の大きさが目立つが、コンラートは直接的コミュニケーション自体を拒んでいたわけではないし、軽視していたわけでもない。そのことを示す顕著な例が、グストロフ号に関する講演の実現への彼の執着である。彼の「ネット外」の現実世界の主要な生活領域であった学校は、彼の講演を許可しなかった（84, 184, 187-188）。彼の講演は、ネオナチの集会で実現するが、右翼聴衆はその意図を理解せず（81-84）、彼はむしろ反感を買ってしまい、後になって、街頭で襲われさえする。これをきっかけに、トゥラはコンラートのために護身用としてピストルを調達し、これがのちに「ゲーヴィット」殺害の凶器となる（182-183, 198）。

この講演は、コンラート逮捕後に法廷でも行われ、これを語り手は多くの引用をまじえて、詳細に報告している（189-193）。語り手は、この講演を学校が許可してさえいれば、ネオナチとの接近もなかったのではないかと考えている（184, 187）。これは、事件の原因を、狭義での「家庭」にではなく、もっぱらそれを取り巻く社会状況に見ようとする強い指向性の一端である。語り手におけるこの個別的「家庭」の軽視は、結果的に、歴史把握における、拡大された普遍的「大家族」の相対的重要性を暗示している。これは、少年が生まれてから犯行にいたるまでの「現在」における家族関係の枠組みにおいてではなく、むしろ共通の「過去」によって結び付けられた「血縁」集団としての「ドイツ人」という枠組みでこそ、物語内部の事件を問わねばならない、という物語の側から読者への暗黙の要求である。

「被害者としてのドイツ人」を物語る歴史的事実は、その「加害者性」を相対化しよう

とする勢力への警戒からタブーとされてきた。¹⁰⁾ そのような「被害者性」の事実を前にしても動揺することなく、ナチズムとその協力者たる「ドイツ人」を自己批判し、「加害者性」の事実を風化させないだけの強さを伴う本質的なナチズム批判は、この作品によれば、社会にも学校にも根付いていない。

その意味で脆弱で欺瞞的な左翼良識派を代表するガビは、教師としても、母としても、コンラートの殺人を防げなかっただけでなく、もともと自分に責任があるとは感じておらず (117)、裁判が終わると、「新しい人生を始める」ために、最終的に息子を見捨ててしまう (213)。

他方、今まで子育てに係わっておらず、事実上彼女よりも先に息子を見捨てていた父パウルは、これを機に父親としての責任を感じ始め、裁判後、服役中の息子と定期的に面会し、家族や息子のガールフレンドに話を聞き、息子の内面に近づこうと努力を続ける (176-179)。そのかいあってか、作品末尾では、ほとんど感動的な仕方では、父と息子の信頼関係構築の兆しが示される。コンラートは、トゥラの差し入れたグストロフ号の模型を精巧に仕上げ、大切にしていたのだが、報告される最後の面会の際、彼は父親の前でその模型を自ら叩き壊すのである (215-216)。

こうして、無力だが愚直な、息子を信じ続ける (結果的に) 「良い」父と、結局は息子を見捨てる無責任な「悪い」母親、それに邪悪な祖母、という構図ができあがる。

裁判の際には、コンラートの精神鑑定が行われるが、そこでは「父の不在」が問題にされる (193-194, 196)。つまり、悪いのは父親である。パウルはこれらの所見を当初からまじめには受け取らない。家族関係を中心にすえる精神科医たちの姿勢は、語り手の報告作業の正当性を相対化し、さらには否定するものだからだ。

臨床心理学的な見解は、目には見えない心のなかの出来事を跡付けることによって成り立つ。それに対して、語り手は、「過去」を体験した者の証言に基づいて、「目に見える」客観的な「物語」としての「真実」の再構成を意図している。ここには事実性の基準を巡る深刻な対立がある。パウルは、第三者たる「ジャーナリスト」として、歴史的事実への

10) グラスによれば、加害者としての罪の大きさのゆえに、被害者としての事実を語ることができなかったのだ。Vgl. Grass, Günter: *Die Zukunft der Erinnerung*, Göttingen 2001, S.32-34

この「被害者性」につながる歴史的事実を公然と語ることが、暗黙の了解として自粛され、良識に反するものとして結果的にタブー化していたという認識は、批評家の多くも自明の前提としている。Vgl. Jähner a.a.O.; Raddatz a.a.O.; Franzen, Günter: *Der alte Mann und sein Meer*, „Die Zeit“ vom 7.2.2002; Augstein, Rudolf: *Rückwärts krebsen, um voranzukommen*, „Der Spiegel“ vom 4.2.2002

「被害者としてのドイツ人」を語ることがほんとうにタブーだったのかどうか、そのタブーをグラスが破ったと言えるのかどうかについては議論がある。少なくとも DDR において、ソ連軍の犯罪や過失を示唆するような事実の公表が不可能だったのは確かだが、西ドイツでは、すでに複数の作家が同様のテーマを取り上げている。しかし、「右寄りではない」という保証付きの大物であるグラスがそれを語ったことに特別な意味を見る者は多い。Vgl. Vormweg a.a.O., S.159; Mayer-Iswandy, Claudia: *Günter Grass, dtv portrait*, München 2002, S.228.

アプローチを図っていたのであって、家族関係における自分のあり方を問う方向性は、作業の途中で不可避免的に生じていたにせよ、二次的なものに過ぎない。彼の自覚では、彼の父親としてのふるまい自体が、心理学的次元における母トウラとの親子関係によってではなく、むしろ、彼女の歴史的に見て特異な体験と、彼の特殊な出自とによって決定付けられているからだ。もちろん、これらの心理学的次元と歴史的次元は実際には不可分の関係にあるのだが、語り手自身は心理学的アプローチに対して不信と嫌悪を隠さず、みずからの方法論に対する絶対的執着を見せる。

当然ながら、家族関係に的をしぼった心理学的アプローチでは、コンラートが「反社会的」と分類されるような行為を実行に移すにいたる心理的動機を推測するだけで、よりによってそのような発現形態（この場合、ナチズムに倣った人種差別的殺人）が選ばれたことの意味までは解明する意図を持たない。逆に、語り手はこの発現形態をなによりも重視している。彼の問題意識においては、少年の（狭義での）家庭事情そのものよりも、その家庭に流れ込む「過去」の歴史的因縁こそが決定的意味を持つ。語り手にとって、コンラートの行為は、「過去」から「現在」をへて「未来」にまで至ろうとする連続性において捉えられるべきものだ。しかし、裁判では、隠された「過去」の持つ社会的影響力、危険な思想的ポテンシャルに十分な注意が払われているとは言えない。この作品では、この点についての語り手の不満が強調されるため、非心理学的、「歴史的」アプローチの、この物語における特権は見逃しようのないものになっている。つまり、ここでは、コンラートの家庭は、父親が子育てに係わろうとせず、両親の関係がうまくいっていない家庭の典型的ケースではなく、なによりもまず、ナチ時代から20世紀末にいたる「ドイツ」の歴史における「過去」との係わりの問題を象徴する家族でなくてはならないのだ。

設定上「過去」との象徴的関係を持たないガビは、この家族から脱落してゆく。コンラートは、ガビの子ではなく、むしろ姑トウラの孫だったのである。そして、事件以降、語り手は息子を理解しようと努め、息子のことがらに最後まで真摯に責任を取ろうとする「父親らしさ」を示す。こうして彼の父としての資格と権利はあらためて確認される。

この作品における家族の物語は、祖母を通じてよみがえった「過去」の暴力的出現によって、「ふつうの」人物にすぎない母の無力が暴かれ、そこに生じる権力の空白に、誕生の伝説を持つ父の帰還する余地が生じ、他者の犠牲を契機にして父と息子とが和解する、すなわち父権復活の神話である。グラスの分身と思しき男性の語り手に対置される、性的パートナーでもある女性主要人物が、戯画化された典型的欺瞞や政治的硬直を担わされるのは、『局部麻酔をかけられて』örtlich betäubt (1969)における、女性教員ザイフェルトの場合と同様である。また、父の不在のために、コンラートが「グストロフ」を擬似的父とすることが悲劇を招くという展開は、おそらく作者グラスの家族幻想における父親の役割の不可欠性を反映している。ここでは、父は不在のままであってはならないのだ。以前まだガビと同居していたときのパウルの父親ぶりに関する記述はほとんど存在しない。暗にそれほど子育てに協力的ではなかったことがほのめかされるだけである(43)。したがってコンラートの人間形成に重要な影響を与えた時期の情報は欠落している。つまり、

パウルは、ただ単に妻に逃げられ、仕事の都合で離れていた父であって、コンラートの前でどんな父を演じていたのかは隠されている。そうすると、この家族の物語の教訓は、どんな父親であっても存在すること自体がたいせつだ、ということになる。この「父」に関する最終的評価の基準は、そばにいたにも係わらずなにもできなかったという設定によって、明らかに否定的な評価が下される「母」ガビの厳しい扱いに比べると、非常に寛容であると言える。

物語展開のダイナミズムそのものが、神話的ニュアンスを帯びた、「過去」の事件を起点とする宿命論的自動性を持つ以上、よみがえる「過去」によって生じた「家族」（「ドイツ人」同胞集団）の危機が、他者（自称「非ドイツ人」・反-ドイツ人「ダーヴィト」）の犠牲のもとに解消されるという筋書きもまた、不可避の事態としてのリアリティを付されていると言える。

この作品からは、さらなる犠牲者を出さないためにこそ、この「家族」の平和、親子の和解が必要なのだ、という論理も読み取ることができないわけではない。しかし、あらゆる直接的メッセージ展開が語り手の自己検閲によって排除されている以上、それを集中的に象徴ないしは体現する具体的エピソードが報告内に存在しない限り、このような論理が強調されているとは言えない。犠牲者を出しながらも危機を乗り越え、あらたな時代へと踏み出してゆく「家族」の物語の肯定的評価を決定的に相対化するような要素は、この作品には見当たらない。

7.

語り手の報告は、不当な仕方で黙殺されてきた「過去」の事実を伝え、同時にこのような閉ざされた「過去」の持つ「呪い」としての暴発のモデルを提示している。そこからは、「自民族の被害を広く語り伝えろ、さもなければ憎悪に歪んだ暴力が新しい世代から生じてくるぞ」、というメッセージが読み取れる。¹¹⁾ このメッセージの直接の対象である「ドイツ人」としての自覚を持つ集団において、グラスやトゥラの世代は、そのような封じ込められた「過去」の当事者であり、パウルは、それを語り継ぐべき世代の代表であり、それら先行世代の動向次第で暴走しかねない世代を象徴するのがコンラートであろう。しかし、もしそうだとしたら、殺人事件のもうひとりの当事者、殺された少年「ダーヴィト」は、このメッセージの構図のなかで、どのような意味を持っているのだろうか。

この事件の被害者となった少年は、チャットルーム内でも、インターネットの外の「現実」生活においても、本名を捨てて「ダーヴィト」を名乗り、「血統」的には非ユダヤ系ドイツ人であるにも係わらず、ヘブライ語とユダヤ教を学んでユダヤ人としてふるまい、

11) グストロフ号沈没事件とコンラートの殺人事件との関係を軸に作品を捉えた場合、「過去」の抑圧と、その結果という構図が成り立つ。„Es geht um die Verdrängung dieser Vergangenheit und deren schädliche Folgen.“ Meyer-Iswandy a.a.O., S.224

両親を戸惑わせていた。しかし、この「ダーヴィット」(本名ヴォルフガング)の奇行の動機や論理が作品中で語られることはない。加害者コンラートの動機に相当するような歴史的背景の説明はまったく行われていない。チャットルーム外での言動の描写も一切ない。¹²⁾ 家庭環境や個性についての最低限の情報が、語り手と言葉を交わした両親の証言としてもたらされるだけだ(184-187)。当然、人物としての存在感は、コンラートに比べるべくもない。

もちろん、この偽ユダヤ少年の動機を推測することはできる。おそらく彼は、ナチズムを担った者たちの子孫としての罪悪感に押し潰された結果として、その現実からの逃避をはかったのだろう。ホロコーストの文脈では、なんの罪もない純然たる被害者であり、ナチズムの罪を問う際の「正義」をなんらの保留もなく掲げることのできる存在、それが彼にとってのユダヤ人だったのかもしれない。

これは一種の責任放棄かもしれない。みずからのドイツ人としてのアイデンティティをその罪もろとも捨てようとしているからだ。しかし、逆に、これこそが徹底的な責任の取り方なのかもしれない。いまだ反ユダヤ主義の根強いヨーロッパにおいて、そして、ドイツにおけるネオナチのみならず、フランス、イタリア、オランダなど、ネオファシストたちの台頭の著しい1990年代以降今日に至るヨーロッパにおいて、「ドイツ人」を「やめ」、あえて、迫害され、排斥される「非ヨーロッパ人」の伝統的代名詞である「ユダヤ人」に「なる」ことは、(少なくともヨーロッパにおいては)暴力的差別者たちとのもっとも明快な絶縁宣言を意味するからだ。¹³⁾

もちろん、語り手は、そのような推測や価値判断を行わない。推測は語り手の方法論に反するし、直接的な政治的価値判断はあらかじめ規制されているからだ。しかし、コンラートの場合には、読者に彼の行為の意味の推測を促す契機となるような十分な量の情報が与えられているのに対して、「ダーヴィット」の場合にはそれが欠けている。「ジャーナリスト」による情報の取捨選択という価値判断行為が行われて初めて、目に見える事実が再構成されるのだとすれば、この「報告」における「ダーヴィット」に関する詳細の欠如は、それがパウルにとっては注目に値しなかったということを示している。

この被害少年の正体が「ドイツ人」であって、ほんもののユダヤ人ではなかったという事実が明らかになっても、裁判ではこのことを恥じるかのように(schamhaft)誰もが言及を避けたと言う。このような状況下で、コンラートの弁護士は、「ダーヴィット」の行為を挑発的であったとし、自ら進んで犠牲になったのだと主張する。この文脈では、彼は人騒

12) チャットルーム内での彼は、「ユダヤ人」を自称している以上、その真偽に語り手が多少の疑いを差し挟んだところで(49, 118, 150),「ユダヤ人」でしかありえない。したがって、「ドイツ人」としての正体と、「ユダヤ人」としての仮面との関係を説明するような記述は、事件以前の段階では、そもそも不可能である。

13) もちろん、パレスチナにおけるイスラエル国家現政権とそれを支持するユダヤ人たちは、悪質な人種差別的テロリストでもあり、「人権に対する罪」を今まさに重ねているのだが、「ユダヤ人」という記号のヨーロッパにおける、ましてやナチズムの過去を問う文脈における位置価値はそれとは明らかに異なる。

がせなネオナチの挑発者であり、加害者少年の殺人を誘発した悪趣味な倒錯者にすぎない。語り手の報告によれば、こうして裁判の流れは加害者コンラートに対して同情的なものとなった(196-197)。このエピソードからは、「ドイツ人」が「ユダヤ人になろうとする」という行為が、現在のドイツにおいてなお、民族への裏切りとして、多くの「ドイツ人」に「恥」の感覚を呼び起こすだろうという作者グラスの批判的見解がうかがえる。

一方で、この作品では、更正の余地のある少年コンラートの道義的責任は一貫して相対化されている。彼の歴史的事実への真摯な関心と熱心な勉強ぶりは、結果としての凶行からは切り離されるかのように「ジャーナリスト的」距離を置いて「報告」される。語り手は、コンラートのネット上での発言について、その出典の偏向や、事実関係の歪曲、情報の恣意的選択、強引な推測などを指摘するにとどまり、あきらかな虚偽を見つけた場合にも、「なぜ嘘をつくのだろう」などと今更のように疑問を添えるに過ぎない(103)。つまり、コンラートの姿勢自体に対する批判は最低限に抑えられている。この「ヴィルヘルム」は、ネオナチである前に、熱心な歴史マニアなのだ。また、繰り返し言及される、眼鏡・巻き毛・ノルウェー風セーターをトレードマークとする、いかにもおとなしそうなコンラートの優等生的風体は、ネオナチを描写する際、同様に繰り返し反復される記号「スキンヘッド」の対極をなす(44, 67, 74, 96, 103-104)。これらの点はすべて、凶暴で野蛮なネオナチのステレオタイプからコンラートを差別化する効果を持っている。

このように、「父」である語り手パウルが、それまでの交流の欠如にも係わらず、血のつながったコンラートに対して無条件の愛着を示し、この息子を理解しようと精一杯の努力をするいっぽうで、ただでさえ存在感が薄く、説明がない分余計、唐突で極端な存在となってしまう「ダーヴィット」には、彼を支持する人物も、彼を理解しようと試みる人物も、作者グラスは用意していない。しかも、「ダーヴィット」には、まったく「正常な」二人の弟がいる。父パウルを経由して、祖母トゥラの遺伝子を受け継ぐコンラートに対して(67, 213)、「ダーヴィット」は突然変異なのである。結局、この偽ユダヤ少年は、多くのドイツ人にとって不愉快な挑発者として登場し、本質的なタネ明かしもないまま、その論理の同時代的意味を問われることもないまま、ただ殺される。殺人によってアピールを行ったコンラートは、結局、物語設定上、この作品そのものという形で、ノーベル賞作家グラスの権威付きで「被害者としてのドイツ人」に関する問題提起を行うことができ、見事その目的を達成したが、結果として命をかけて信条を貫いた「反ドイツ人」「ダーヴィット」のアピールは、無視されているのである。

グラスは、グストロフ暗殺犯ダーヴィット・フランクフルターを、武装闘争を呼びかけた(ユダヤ人の枠を越えた)反ナチ活動家としてではなく、うだつのあがらない病弱な「ユダヤ人」学生として描いている(16-17)。このような描写は、ヒロイズム一般の相対化による、暴力の連鎖への対抗戦術とも解釈できる。しかし、この人物像形成は史実の歪曲として批判されている。¹⁴⁾ このフランクフルターに関する記述の傾向もまた、この作品にお

14) Vgl. Mayer-Iswandy a.a.O., S.229

ける少年「ダーヴィト」の政治的・思想的現象としての意味を矮小化する伏線となっていると言える。

コンラートには、入獄中も熱心に面会に訪れるローズィという忠実なガールフレンドがいる一方、「ダーヴィト」には特定の異性関係がなかったという設定(185)も、父権復活の神話に組み込まれた殺人事件の加害被害関係を考えると、無意味なものには見えない。つまり、同じ袋小路にはまったふたりの少年ではあるが、コンラートにはすでに「男」としての成熟の兆しがあり、生命への執着とみずからの変化への希望の契機があるのに対して、卓球¹⁵⁾を通してしかひとと接することがなかった(185)という「ダーヴィト」は、あきらかに、彼のライバルよりも人生においてひ弱であり、社会的な適応不全もより深刻であったことが暗示されている。つまり、前者が生き残り、後者が殺されるという展開は、彼らに与えられた個人的属性によって生じるリアリティによって、ある程度正当化されているのである。

それにも係わらず、このふたりの加害者被害者の関係は、逆転していたかもしれない。コンラートが象徴的復讐を演じたように、「ダーヴィト」が暗殺事件の再演を行ってもおかしくはなかったはずだ。ところがそうはならなかった。同胞ドイツ人たちの啓蒙に努めてきたグラスの作家活動・政治活動の文脈から考えれば、のちに反省するチャンスを与えられるために、殺人者たる「ドイツ人」がどうしても生き残らねばならなかったのかもしれない。

また、「ダーヴィト」がほんとうは「ドイツ人」だったという設定は、ある種の政治的離れ業であったとも言える。もし、犠牲者がほんもののユダヤ人であったりすれば、人種差別的殺人者としての少年の更正を無根拠に期待するような展開は、それだけでこの作品を政治的スキャンダルに巻き込んでいたことだろう。コンラート自身は、自分にとっては、犠牲者が自称「ユダヤ人」であるだけで十分だったと言明している(182)。つまり、「ほんもの」のユダヤ人であるかどうかはどうでもよかったわけだが、作者グラスにとってはそうはいかなかったのである。

祖母トゥラは、悲劇からの生還の神話を、家族の物語として「現在」に復活させるが、記号「グストロフ」(暗殺されたナチ幹部党员＝撃沈された船)の伴うコノテーションによって、この「家族の物語」は「ドイツの物語」と化す。「ドイツ」の「過去」を象徴する事件によって刻印された「家族」は、「過去」の復活によって崩壊の危機に曝されるが、自分の出自と正面から向き合ったパウルが、この「家族」を救う。政治的正義感を動機として初めて父親意識に目覚めた父パウルの息子コンラートへの接近の努力は、「他者の」

15) 卓球は、コンラートと「ダーヴィト」の共通の趣味である(49)。コンラートは獄中でも卓球で目覚ましく活躍するため(204)、作品中では、この卓球という小道具は、彼の身体的存在感の回復、直接的人間関係構築の契機として機能していると言える。それに対して、「ダーヴィト」のほうは、この作品の物語世界内部では実際に卓球をプレイするチャンスを与えられていない。

殺害を契機に、父と息子との間に新たな信頼関係をもたらす。¹⁶⁾

すなわち、「家族＝ドイツ」は、裏切り者の粛清によって結束を高め、「家族」としての体裁を保つのである。まるで、「ほんものの」他者（「ほんものの」ユダヤ人あるいは「ほんものの」外国人）の迫害に比べて、「にせものの」他者（裏切り者としての偽ユダヤ人＝反ドイツ人）の迫害の罪は軽いかのようだ。スキャンダルを求める軽薄なマスコミは、当初この事件を「ネオナチによるユダヤ人少年殺害」の見出しで大々的に報じたが、被害者がドイツ人だったことがわかると、見向きもしなくなったという（201）。もちろん、このような風潮をグラスは批判的に取り上げているのだろうが、原則として価値判断を避けるこの作品の語り方の特徴と、記述の総量の絶対的な少なさによって、これもまた、作品内で主要事件群を取り巻く「現実」を構成する、数多くの周辺の断片のひとつにしかない。

犠牲者「ダーヴィット」に対する共感の試みや、哀悼の表明も、この物語にはほとんど存在しない。半ばサイバースペースの住民に過ぎなかった、身体性の希薄な偽ユダヤ少年の特殊個別的な死は、作品全体の背景に響き続ける、グストロフ号沈没時の、多くの女性と子供を含む「ドイツ人」犠牲者たちの集団的身体が放った断末魔の悲鳴に塗り潰されてしまっている。

8.

グラスは、故郷ダンツィヒを含む、第二次大戦でドイツが失った領土を巡る議論や、戦後のふたつのドイツ、そして1990年に実現した統一を巡る議論において、国家体制や領土とは別の次元での「ドイツ」、すなわちヘルダーやヴィーランドに倣った「文化国家」Kulturnationとしての「ドイツ」概念の復権を提唱していた。¹⁷⁾統一ドイツ国家が模索され始めた18世紀、言語と文化を中心に据えた「ドイツ」国家概念は、偏狭な分離主義に対する、当時の「左翼の側からの愛国主義」の基点であった。さらに時代は遡るが、30年戦争末期のドイツ語詩人たちの会合を描いた『テルクテの出会い』Das Treffen in Telgte (1979) もまた、このような「ドイツ」概念を先取りする出来事を扱っており、グラスのこの「文化国家」概念への思い入れの深さを反映している。

16) 1980年代初頭、グラス自身も、息子の右傾化に悩んだ経験がある。ほかの子供たちは、父に倣ってSPDあるいはグリュネン支持者となったが、問題児Brunoは熱烈なCDU支持をアピールすることで反抗した。また、このBrunoは、インターネットでMittlere Reifeを取得している。この息子との交渉は、『蟹の横這いで』の構想に大きな影響を与えているはずだ。Vgl. Jürgs, Michael: Bürger Grass, Biografie eines deutschen Dichters, München 2002, S.345-346

17) Vgl. Grass, Günter: Nachdenken über Deutschland, Aus einem Gespräch mit Stefan Heim in Brüssel 1984. In: Deutscher Lastenausgleich. Wider das dumpfe Einheitsgebot. Reden und Gespräche, Frankfurt am Main 1990, S.33, 37; Grass / Zimmermann a.a.O., S.139-142; Mayer-Iswandy a.a.O., S.223

ドイツ語を共通基盤とした「文化」のレベルでの統一体としての「ドイツ」というイメージを介して、彼のダンツィヒに対する郷土愛は、「ドイツ」に対する愛へと拡大されるが、この「愛国心」は、ダンツィヒがすでにドイツ領ではなくなっており、その現状をグラスが受け入れていること、そして彼がスラヴ系少数民族カシュブ人の血を引いていることで、領土拡大主義的、血統主義的な「愛国心」のアンチテーゼとなる条件をあらかじめ保証されていると言える。

このような特殊な出自を活用しつつ、まさにその故郷への執着を契機に、他者との和解、他者との共存を実現する可能性を、彼は『鈴蛙の鳴き声』で語った。主人公たちは、戦争による故郷喪失者としての共通の悲しみを互いに尊重することで、ドイツとポーランドの「過去」の宥和、「未来」における共存を模索したのだった。

しかし、『蟹の横這いで』の扱うテーマは、この「郷土愛＝文化国家的愛国主義」の文脈において、はるかに危険なものと言える。「ドイツ人」読者ならば、同胞の悲劇への感情移入を強く促されずにはいないだろうし、その連帯感が非グラス的、無限定的「愛国心」を呼び起こしたとしても不思議はないからだ。

もちろんグラスは、この「過去」について語る行為の危険性を十分承知しており、「加害者」に対する憎悪をかきたて、復讐心を広めるような姿勢に対して、物語構造の範囲内で慎重に警告を繰り返している。たとえばチャットルームでコンラートが引用する、ナチ時代そのままの言説や、不正確で一方向的な資料、史実の悪意ある恣意的な取捨選択などを、語り手は逐一指摘し、より客観的な資料の対置によってそれらを相対化している。最重要人物トゥラも、自分自身東部ドイツ難民としてソ連軍の残虐行為に怯えた経験を持つにも係わらず、ロシア人たちに対する憎悪を語ろうとはしない。¹⁸⁾

しかし、このような控えめな態度は、作品全体の構図のなかでは、いくつかの視点のうちのひとつに過ぎず、グストロフ号沈没事件、およびそのほかの東部地域難民の悲劇の衝撃的な情景そのものが作品中に占める特権的位置に根本的変更を強いるものではない。「戦争犠牲者」としての「ドイツ人」を描く悲惨な場面の迫力と、それらの歴史的事実を語ることのタブーによって少年が殺人を犯すまでに追い詰められてしまう詳しい経緯のリアリティは、慎重な態度に徹する語り手の傍白を質量ともに圧倒している。特に、同世代としてソ連軍の恐怖を味わった者たち、および、その体験を語り聞かされてきた者たちにとっては、この悲劇の帯びている意味は既に自明であり、この作品を読む際に味わう「自分たちの苦しかった体験がやっと市民権をえた」という感動は余りにも大きい。¹⁹⁾

その一方で、この作品においては、コンラートの犯す殺人が想起させるべき、ナチスによるホロコーストのリアリティは、グストロフ号乗船者を含む、ドイツ東部地域難民の悲劇のリアリティには遠くおよばない。殺人事件の被害者への共感が存在しないからだ。

18) F. J. Raddatz は、このトゥラの姿勢を、グラスの語り方が「過去」との冷静な距離を保っている証拠の一例として挙げている。Vgl. Raddatz a.a.O., S.126-128

19) Vgl. Franzen a.a.O.

グラスはかつて『局部麻酔をかけられて』において、ベルリン在住のドイツ人にとってのベトナム戦争をテーマに、遠く離れた場所にいる他者の身体に生じた「痛み」を感じようとする困難な試みを描いた。語り手兼主人公の高校教師は、みずからの戦争体験を踏まえ、つまり、同胞の「痛み」を手掛かりにしながら、他者の「痛み」へのアプローチを模索したのだった。

しかし、『蟹の横這いで』の物語世界においては、遠い他者の「痛み」と同胞の「痛み」を、同じ人間の「痛み」としての共通性において受容する可能性は示されない。むしろ、その象徴である「ダーヴィット」が簡単に射殺されてしまう展開によって、他者の「痛み」をあえて感じようとする試みは否定されていると言える。このことは、失われた故郷デンツィヒへのノスタルジーを自らの作品に注入し続けてきたグラスの、地域主義的、文化的愛国主義の限界を示している。

9.

ノーベル賞作家グラスは、ついに「愛国者」としてドイツ文壇に迎えられた。あくまでも「ドイツ人」としての道義的責任から、「ドイツの罪」にこだわってきたあの彼が、「ドイツの悲劇」を「価値判断抜きで」²⁰⁾ (つまり無闇に批判したり、保留をつけたりしないで) 描き、哀悼の意を表したのだ。しかも、21世紀を生きるドイツ人の若い世代を代表して登場するコンラートは、ネオナチに接近し、その信条から殺人まで犯しながら、一貫して「価値判断抜きで」(寛容な共感を込めて) 描かれる。

このようなテーマを冷静に受け入れられるほどに、「ドイツ」が成熟したとの歴史的状況判断から、グラスはこの作品を書いた。²¹⁾ 常識的に考えて作家としての晩年を迎えた彼は、このテーマが自分より先に「右翼」に取り上げられ、利用されることをなによりも嫌ったのだ(99)。「戦争被害者としてのドイツ人」問題が放置され続けることの危険性、あるいはこの問題の取り上げ方の難しさそのものを、彼は描きかかったのだろう。それだけに、当初の反響の多くがグストロフ号事件と東部ドイツ難民の悲劇をテーマとしたこと自体を歓迎するものばかりだったことに、彼は戸惑いを隠さなかった。²²⁾ しかしながら、おそらくは彼の意図に反して、この物語はあまりにも「ドイツ」主義的な、「家族=同胞」主義的な閉鎖的世界を作り出してしまい、それは、多くの人々によって、頑固な反逆者グラスの「ドイツ」と「ドイツ人」に対する和解宣言と解釈された。

20) Vgl. Raddatz a.a.O., S.126-128, 130; Meyer-Iswandy a.a.O., S.225

21) グラスは、ヒトラーの『我が闘争』の解禁を支持し、極右政党の禁止にも反対している。議論そのものがタブーになることをこそ彼は警戒しているのであって、公然とナチズム的傾向を持った言説や運動が現れることそのものは怖れてはいないと言える。つまり、それに対抗しうるだけの強度を持った反対勢力の存在を信じているのである。Vgl. Krause, Andreas: Nie wieder Bücherverbannung, „Berliner Zeitung“ vom 7.2.2002

22) Vgl. Günter Grass kritisiert „revanchistischen Unterton“, „SPIEGEL ONLINE“ vom 5.2.2002.

こうして、反グラス派、嫌グラス派は、敵の豹変にホッと胸を撫で下ろしたわけだが、他方、物語構築における彼の巧妙な戦術によって、従来の彼の政治的路線は最低限確保されており、強いて好意的に読めばその一貫性は確認できる。語り手は、グラスの政治的信条をごく控えめにしか代弁せず、その結果、報告内容自体の孕む強力なメッセージの前でそれはかすんでしまうが、これはジャーナリスト的な語り方をしなければならないという設定上の規制によって正当化される。それゆえ、親グラス派の多くもまた、今回も安心して作品を受け入れることができた。

その結果が、この右も左もない大絶賛である。この現象が、現在のドイツ人の歴史意識、政治意識を象徴するものなのかどうかは安易に判断できないが、この作品が、多数派の「ふつうのドイツ人」に初めて歓迎されたグラス作品として歴史に残ることだけは確かだろう。

Die Krise einer Familie und ihre Lösung Zur Rolle der Familie in der Novelle „Im Krebsgang“ von Günter Grass

KINEFUCHI Hiroki

In seinem neuen Buch „Im Krebsgang“ behandelt Günter Grass ein Tabu-Thema der deutschen Zeitgeschichte: den Untergang der „Wilhelm Gustloff“ am 30. Januar 1945. Das ehemalige KdF-Schiff (KdF war die Freizeitorganisation „Kraft durch Freude“ der Nationalsozialisten), später mit Flakgeschützen ausgerüstet, wurde als schwimmende Kaserne und Lazarettsschiff durch die Torpedos eines russischen U-Bootes versenkt. Die meisten der knapp 9000 Opfer waren Flüchtlinge aus den Ostgebieten des damaligen Deutschlands.

Vor allem wegen dieser Thematik fand die neue Grasssche Novelle überwiegenden Beifall.

Neben der Versenkung der „Gustloff“ gibt es in dieser Novelle noch zwei weitere Hauptereignisse: das Attentat auf einen NS-Funktionär und den Mord an einem angeblich jüdischen Jungen durch einen jungen Neonazi.

Wilhelm Gustloff, der Namensgeber des unglücklichen Schiffes, ursprünglich Chef der Schweizer Landesgruppe der NSDAP, wurde 1936 von einem Juden namens David Frankfurter getötet. Der Name dieses sog. „NS-Märtyrers“ steht für das Schiff, das die Leiden des deutschen Volkes während der Kriegszeit symbolisiert. In Verbindung mit diesem Vorfall steht wiederum ein in jüngster Zeit begangenes Racheakt von seiten der Rechtsradikalen.

Dabei lässt Grass seine Heldin von einst, Tulla Pokriefke aus dem Roman „Hundejah-

re“ (1963) und der Novelle „Katz und Maus“ (1961), wieder auftreten. Die siebzehnjährige Tulla betritt hochschwanger die „Gustloff“ und überlebt als eine der wenigen Passagiere das Unglück. Ihren Sohn Paul, zugleich den Ich-Erzähler der Novelle, bringt sie an Bord des zu Hilfe geeilten Torpedobootes zur Welt. Und nun will sie ihr Erlebnis verkünden und kämpft um Gehör. Ihr gehört so das Vorrecht als überlebende Zeugin wie als Mutter in den Berichten von Paul.

Diese parallelisierten Stränge referiert der Erzähler distanziert als beruflicher Journalist. Aber diese reporterhafte Tätigkeit enthält im voraus eine unvermeidliche Schwierigkeit: die von ihm selbst berichteten Episoden sind andererseits auch seine eigene Familiengeschichte. Als der Täter des durch neonazistische Ideen motivierten Mordes stellt sich nämlich der Sohn des Erzählers heraus.

Der Sohn, Konrad, lebte bei der geschiedenen Frau des Erzählers. Er hat von Tulla einen Computer bekommen und ihre Gustloff-Geschichten dazu. Nun recherchiert er parallel zu seinem Vater den „Meuchelmord“ an Gustloff und den Fall des gleichnamigen Schiffs und füttert mit den Ergebnissen seinen nach Rache schreienden Chatroom. Für ihn wird Wilhelm Gustloff gleichsam zu einem Vorbild bzw. dem Äquivalent des abwesenden Vaters.

Später wird er wegen seiner politischen Haltung von seiner Mutter Gabriele aufgegeben und zieht zu seiner Großmutter um. Dort vollendet sich die Quasi-Familie: Tulla und Gustloff als Ersatzeltern. In dieser Familie kristallisiert sich der Fluch der lange unberührbar gebliebenen Vergangenheit in der Kriegs- und Nachkriegszeit Deutschlands. Die unausbleibliche Folge ist ein Mord.

Im Chatroom lernt Konrad einen jungen Deutschen kennen, der sich als Jude ausgibt und der sich ebenso glühend mit dem Attentäter David Frankfurter identifiziert wie der Webmaster mit Gustloff. Eines Tages treffen sich die beiden, und Konrad erschießt den angeblich jüdischen Jungen, der in Wirklichkeit aber kein Jude war.

Anlässlich dieser Krise der Familie gelingt es dem Erzähler, dem Sohn näherzukommen und seine eigene Vaterschaft unter Beweis zu stellen. Über ein fremdes Opfer wird somit der Frieden der Familie wiedergewonnen. Einzig die Bande des Blutes bilden hier das entscheidende Moment des Schicksals. Auf diese Weise verkörpert der Familienmythos mit seinem versöhnlichen Ende eine Geschichte des deutschen Volkes als „Verwandte“.

In diesem Mythos wirken die Schmerzen der Deutschen und zugleich „der Familie“ eindeutig real und eindrucksvoll, und dementsprechend sind die des jungen „falschen“ Juden kaum spürbar. Denn es fehlt hier an einer ausreichenden Erklärung seiner Umstände. Es gibt hier keine Person, die die merkwürdige Vortäuschung falscher Tatsachen von diesem antifaschistischen Jungen zu verstehen versucht. In Anbetracht dieser Tatsache ist die Tat von Konrad viel verständlicher als die von David.

Wie oben bereits erwähnt, weist die Entwicklung des Erzählens bei allem sorgfältigen Vorbehalt vom Autor eine familiäre Geschlossenheit auf. An diesem Ergebnis lassen sich die heutigen Grenzen des Grass'-alternativen Patriotismus im Kontext des Problems „Deutsche als Kriegsoffer“ ablesen. Seine bisherigen Werke waren fast

ausschließlich eindeutig aus der Perspektive der „Minderheit“ geschrieben. Im Gegensatz dazu steht in diesem Roman, wie es scheint, die „Mehrheit“ im gegenwärtigen Deutschland im Vordergrund.

Der Autor war damit unzufrieden, dass in ersten Rezensionen seine Novelle als ein Bericht über die Versenkung eines Schiffes gewertet wurde, das ausschließlich als „Flüchtlingsschiff“ diene. Nach dem Erscheinen dieser Novelle kritisierte er wiederholt den „revanchistischen Unterton“. Doch trotz seiner eigentlichen Absicht bietet der Text selbst hinreichende Gründe für ein „Mißverständnis“.